

第三章 神の永遠のご計画について

第一節（一）「神のご計画は福音の土台である」

はじめに

今日から第三章「神の永遠のご計画について」を学びます。この章は、ウェストミンスター信仰告白全体の中でも、最も多く議論されてきた章の一つです。おそらく、「ウェストミンスター信仰告白」と聞いて、多くの人が最初に思い浮かべるのは「予定論」ではないでしょうか。実際、この第三章だけが独立して取り上げられることも少なくありません。しかし、その読み方には注意が必要です。第三章は、単独で理解できる章ではありません。第一章では「神は聖書を通してご自身を現してくださる」ことを学びました。第二章では「その神は父・子・聖霊なる唯一の神であり、知恵と義と愛に満ちたお方である」ことを学びました。そして今、第三章で語られるのは、その神が永遠から抱いておられたご計画です。ですから、この章は「予定論」という抽象的な教理から始まるものではありません。**三位一体なる神の救いのご計画**を学ぶ章です。ここを見失うと、予定論は冷たい運命論になってしまいます。しかし、聖書が語る神は運命ではありません。アブラハムを召し、イスラエルを導き、預言者を遣わし、ついには御子イエス・キリストを世に遣わされた、生ける神です。第三章は、その神の真実を告白しています。

一 「神の計画」は聖書全体を貫く主題

公認訳は、第三章第一節を次のように始めます。「神は永遠の昔から、御自身の意志の最も知恵に富み、最も聖なるご計画によって、起こるすべてのことを、自由に、また不変に定められました」。この一文を読むと、「定められた」という言葉が強く印象に残るかもしれません。しかし、信仰告白がまず語っているのは、「定め」ではなく「神のご計画」です。聖書を最初から読むと、この「神のご計画」は一つの大きな流れとして現れます。創世記一章では、神は天地を創造されます。創世記三章では、人間は罪に陥ります。ところが、その直後に神は救いの約束を与えられます（創世記 3 章 15 節）。さらに神はアブラハムを召し、すべての国々が彼によって祝福されることを約束されました。イスラエルをエジプトから導き出し、契約を結び、預言者たちを遣わし、ダビデ王家に永遠の王を約束されます。そして新約聖書では、その約束がイエス・キリストにおいて成就します。最後に、ヨハネの黙示録では、新しい天と新しい地が示されます。つまり、聖書は偶然に出来事が積み重なった歴史

ではありません。神が一つの救いの目的に向かって導いておられる歴史なのです。第三章が語る「神の永遠のご計画」とは、この救済史全体を支える神の真実を指しています。

二 「永遠の昔から」とは何を意味するのでしょうか

信仰告白は「神は永遠の昔から」と語ります。ここで重要なのは「永遠」を時間の始まりとして考えないことです。私たちは「昔」という言葉を聞くと、時間の流れの中のある一点を思い浮かべます。しかし、神は時間の中に閉じ込められたお方ではありません。第二章で学んだように、神は永遠なるお方です。時間もまた、神の創造の御業の一部です。したがって、「永遠の昔から」とは、「神が時間の中である時点に計画を立てられた」という意味ではありません。むしろ、神のご計画は神ご自身の永遠のご意志に属するものであり、創造以前から神のうちにあったということを告白しています。このことは、エフェソの信徒への手紙一章でも明確に語られています。「天地創造の前に、神はわたしたちをキリストにおいて選ばれました」（エフェソ 1・4）。ここで注目したいのは、「選び」がまず語られるのではなく、「キリストにおいて」という言葉です。パウロは予定をキリストから切り離して語りません。神の永遠のご計画は、最初からキリストにおいて立てられた救いのご計画なのです。ここに、改革派神学が決して運命論ではない理由があります。神のご計画は人格的です。それは父・子・聖霊なる神の愛と知恵に満ちたご計画なのです。

三 神のご計画は「自由に」立てられました

信仰告白はさらに、「自由に、また不変に定められました」と告白します。「自由に」とは、神が何ものにも強制されることなく、ご自身の完全な知恵と善に基づいてお決めになったという意味です。これは第二章第二節で学んだ「神の自己充足」と深く結びついています。神は世界を必要とされたから創造したのではありません。神は救いを必要とされたから計画したのでもありません。神は、ご自身の愛と恵みの豊かさの中から、自由に創造し、自由に契約を結び、自由に救いの歴史を始められました。ですから、「神の自由」は気まぐれではありません。それは、神の知恵・義・愛と完全に一致した自由です。私たち人間の自由がしばしば自己中心的な選択になってしまうのとは対照的に、神の自由は常に善を行う自由なのです。

四 神は罪の作者ではありません

第一節は、神が永遠からすべてを定められたと告白した後、すぐに次のように続けます。

「しかし、それによって神は罪の作者とはならず、被造物の意志に暴力が加えられることもなく、第二原因の自由や偶然性が取り除かれることもなく、かえってそれらが確立されます。」

この一文は、ウェストミンスター信仰告白の中でも最も慎重に書かれた文章の一つでしょう。ここで注目したいのは、「しかし」という接続詞です。信仰告白は、神の主権を語ると同時に、その教えが誤解されることを十分承知していました。もし「神がすべてを定められた」という言葉だけを取り出せば、「それでは罪も神が造られたことになるのではないか」という疑問が生まれます。信仰告白は、その結論を明確に否定します。**神は罪の作者ではありません。**これは改革派教会が一貫して守ってきた告白です。

五 聖書は神の主権と人間の責任をともに語ります

聖書を読むと、不思議なことに気づきます。それは、神の主権と人間の責任が、どちらか一方ではなく、常に並べて語られていることです。その代表的な例が、ヨセフの物語です。兄たちはヨセフを憎み、奴隷として売り渡しました。これは明らかに兄たち自身の罪でした。ところが、物語の最後でヨセフは兄たちにこう語ります。

「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために用いられました。」（創世記 50・20）

ここでは二つのことが同時に語られています。兄たちは、自らの意志によって悪を行いました。その責任は兄たちにあります。しかし同時に、その出来事全体を神は救いの歴史のために用いておられました。神は悪を命じたものではありません。しかし、人間の悪をも支配の外に置かれることなく、ご自身の救いの目的へと用いておられます。この二つは矛盾しているように見えます。しかし聖書は、どちらか一方を選びません。神の主権も、人間の責任も、ともに真実として語るのです。

六 十字架は最も深い例です

このことは、イエス・キリストの十字架において最も明らかになります。ペトロはペンテコステの日にかこう語りました。

「このイエスは、神があらかじめ立てられたご計画と予知とによって引き渡されたのですが、あなたがたは不法な者の手で十字架につけて殺したのです。」（使徒言行録 2・23）

この一節には、神のご計画と人間の責任が一つの文の中で語られています。イエスの十字架は偶然ではありませんでした。神の救いのご計画の中心でした。しかし、それだからといっ

て、イエスを十字架につけた人々の責任が消えるわけではありません。彼らは、自らの意思で行動しました。だから裁かれます。神のご計画は、人間を操り人形にすることによって実現したわけではありません。人間の自由な行為を通して、それを超えるかたちで成し遂げられたのです。これは理屈だけでは説明しきれない神秘です。しかし、聖書はこの二つを切り離していません。

七 神は悪を善へと変えられる

ここで一つ、牧会的に大切なことを申し上げたいと思います。「神がすべてを支配しておられる」と聞くと、苦しみや災いまで神が望まれたのか、と考えるしまう方がおられます。その問いに対して、聖書は単純な答えを与えてはいません。むしろ、悪や苦しみの現実を深刻に受け止めています。詩編には嘆きがあります。預言者たちは暴力と不正に涙を流しました。主イエスご自身も、ラザロの墓の前で涙を流されました。したがって、「神のご計画だから悲しむ必要はない」と言うことは、聖書的ではありません。しかし同時に、聖書は希望を語ります。神は悪そのものを善とは言われません。けれども、悪が神の最終的な目的を打ち砕くことはありません。十字架が復活へと導かれたように、神は人間の罪と悲しみをも、ご自身の救いの御業の中に組み入れて、新しい命へと導いてくださいます。この希望があるからこそ、パウロは「神を愛する者たちには、万事が益となるように共に働く」（ローマ 8・28）と語ることができたのです。

八 「第二原因」とは何でしょうか

「第二原因」という言葉は、今日ではほとんど使われません。そのため、この文章が難しく感じられるのも無理はありません。教会は古くから、神を**「第一原因」と呼び、被造物を通して働くさまざまな原因を「第二原因」**と呼んできました。たとえば、一粒の麦が実を結ぶことを考えてみましょう。農夫が種を蒔きます。雨が降ります。土壌が養分を与えます。太陽が光を注ぎます。植物は成長し、やがて実を結びます。科学は、これらの過程を詳しく説明することができます。しかし聖書は、それだけでは終わりません。そのすべてを支え、命を与え、秩序を保っておられる神がおられると語ります。つまり、農夫も、雨も、土も、太陽も、みな「第二原因」です。その背後で世界全体を支えておられる神が、「第一原因」です。ですから、神の主権を信じるとは、自然の法則を否定することではありません。むしろ、自然の秩序そのものが神の摂理の中にあることを信じることなのです。

九 神の摂理は被造物を尊重されます

ここで興味深いことがあります。ウェストミンスター信仰告白は、「第二原因が取り除かれる」とは言いません。むしろ、「確立される」と告白します。これは非常に改革派らしい表

現です。神がすべてを支配しておられるからといって、人間の働きが不要になるのではありません。医師は病人を治療します。教師は子どもを教えます。農夫は畑を耕します。牧師は福音を語ります。これらはすべて、神が用いられる手段です。神は奇跡によってすべてを直接行われるのではなく、通常は被造物を用いて働かれます。宗教改革者カルヴァンも、『キリスト教綱要』の中で、神の摂理を信じることは、医者にかかることや農作業を怠る理由にはならないと繰り返し述べています。神は手段を軽んじられません。むしろ、手段を通して働かれる神なのです。

十 「偶然」は本当に偶然なのでしょうか

信仰告白はさらに、「偶然性も取り除かれない」と言います。ここでいう「偶然」とは、「神の支配の外にある出来事」という意味ではありません。私たち人間の立場から見れば、偶然に見える出来事があるということです。たとえば、ルツ記では、モアブ人の女性ルツが「たまたま」ボアズの畑へ行ったように描かれています（ルツ 2 章 3 節）。物語の登場人物にとっては偶然でした。しかし、物語全体を読む読者は、それが神の導きであったことを知ります。ルツとボアズの出会いは、やがてダビデ王、さらにイエス・キリストへと続く系図につながっていきます。私たちの人生にも、「偶然だった」と思う出来事があります。ある人との出会い、思いがけない病、突然の転勤、予期しなかった別れ。その時には意味が分からなくても、後になって振り返ると、「あの出来事があったから今がある」と思うことがあります。もちろん、すべての苦しみの意味を私たちは知ることはできません。しかし、神はその歩みを見失われることはありません。ウェストミンスター信仰告白が「偶然性」を認めながらも、神の摂理を告白するのは、そのためです。

歴史・神学コラム①

「第一原因」と「第二原因」はどこから来たのでしょうか

「第一原因」「第二原因」という区別は、中世スコラ神学に由来する表現ですが、その思想そのものは聖書の中に見ることができます。たとえば、イザヤ書では、神は歴史を導く主として描かれる一方、諸国の王たちは自らの判断で行動しています。また、箴言 16 章 9 節には、「人間は心に計画を立てる。主が一步一步を備えてくださる」とあります。人間は実際に計画を立てます。その行為は現実のものです。しかし、その歩み全体は神の御手の中にあります。改革派神学は、この二つを対立させません。神の主権を強調するあまり、人間の責任を消し去ることもしません。逆に、人間の自由を強調するあまり、神の摂理を弱めることもしません。この均衡こそが、ウェストミンスター信仰告白の特徴です。そして現代の改革派神学でも、この均衡は大切にされています。たとえば、ジョン・ウェブスターは、神の主

権は被造物の固有の働きを打ち消すのではなく、それを支え完成させるものと論じています。また、マイケル・アレンも、神の摂理を、創造された秩序を尊び保持する神の恵みの働きとして説明しています。

第三章 第二節「神の予定と人間の応答」

ここまで第三章第一節を学びました。そこでウェストミンスター信仰告白は、神が永遠の昔から、ご自身の最も知恵に富み、最も聖なるご計画によって、起こるすべてのことを自由に、また不変に定められたことを告白していました。しかし同時に、信仰告白は大切な留保を付け加えていました。神は罪の作者ではありません。また、人間の意志が失われることもありません。さらに、神は被造物を手段として用いられ、私たちが「偶然」と呼ぶ出来事さえも、その摂理のうちに導いておられます。こうして第一節は、神の絶対的な主権と、人間の責任とをともに守ろうとしていました。第二節は、その続きです。

ここでは、「神はどのような根拠に基づいて聖定されたのか」という問題が扱われます。言い換えれば、**神は未来を見通した結果として予定されたのか、それとも、神のご意志そのものが予定の根拠なのか**。これが第二節の主題です。この問題は一見すると専門的な神学論争のように思われます。しかし実際には、私たちが神をどのようなお方として信頼するかという、信仰の中心に関わる問いでもあります。

一 第二節が問いかけていること

第二節を読む前に、一つ考えてみたいことがあります。ある人は、このように考えます。「神は未来をご存じである。だから、誰がイエス・キリストを信じるかをあらかじめ見て、その人々を選ばれたのだ。」これは一見、もっともらしく聞こえます。神の全知を尊重し、人間の自由も認めているように思えるからです。実際、この考え方は教会の歴史の中でも広く論じられてきました。しかし、ウェストミンスター信仰告白は、この考え方を採りません。なぜでしょうか。それは、神の選びを**人間の将来の行動に依存させる**ことになるからです。もし神の選びが、「将来この人は信じる」という予見に基づくなら、救いの決定的な根拠は神ではなく、人間の側にあることになります。そうすると、恵みは報いに近いものとなり、パウロが語る「恵みによる救い」の意味が揺らいでしまいます。第二節は、この点を非常に慎重に語ろうとしています。

二 聖書は何を語っているのでしょうか

この問題を考えるとき、私たちは一つの聖句だけで結論を出してはなりません。第一章で学んだように、聖書は神ご自身が教会に与えられた正典です。したがって、正典全体の証言に

耳を傾ける必要があります。まず申命記には、このような言葉があります。「あなたは命を選びなさい」（申命記 30・19）。ここでは、人間に応答が求められています。神は契約の民に対して、従うか背くかという選択を迫られます。また、ヨシュアも、「あなたたちは、主に仕えたいと思う者を今日選びなさい」（ヨシュア 24・15）と民に語りました。このような箇所を見ると、人間には現実の応答が求められていることが分かります。

一方、新約聖書では、パウロはエフェソの信徒への手紙でこう語ります。「天地創造の前に、神はわたしたちをキリストにおいてお選びになりました」（エフェソ 1・4）。ここでは、人間の決断よりも先に、神の選びが語られています。さらにローマ書では、「神の賜物と招きとは取り消されません」（ローマ 11・29）と語られます。このように聖書は、**神の選びと人間の応答**の両方を語っています。どちらか一方だけを強調すると、聖書全体のバランスを失います。

三 旧約聖書における「選び」

ここで少し立ち止まり、旧約聖書を振り返ってみましょう。「選び」という言葉は、パウロの手紙から突然現れた思想ではありません。すでに旧約聖書の初めから、神は選ぶ神として描かれています。神はアブラハムを選ばれました。それは、アブラハムが他の人々より優れていたからではありません。むしろ、神が一方的な恵みによって召されたのです。また神はイスラエルを選ばれました。申命記七章には、「主があなたたちを愛されたからである」と繰り返し語られています。イスラエルは最も大きな民族だったからではありません。最も力ある民族だったからでもありません。神の自由な愛が、その選びの理由でした。ダビデも同じです。預言者サムエルは、立派な兄たちではなく、羊を飼っていた末の子ダビデに油を注ぎました。そこには、人間の評価とは異なる神の自由な選びが示されています。このように旧約聖書を読むと、「選び」は決して冷たい予定論ではありません。それは、神が歴史を通して約束を実現していかれる契約の恵みなのです。

ありがとうございます。それでは、第 16 回の続きをお届けします。ここからは、先生がアップロードしてくださった公認訳第二節の本文を、一文ずつ丁寧に講解してまいります。

四 神の聖定は「予見された信仰」に基づくものではありません

公認訳第二節は、要旨として次のことを告白しています。神は、未来に起こることを予見された結果として聖定されたのではなく、御自身のご意志に基づいて定められた。ここで信仰告白が区別しているのは、「神の予知」と「神の聖定」です。神は確かに未来をご存じです。第二章で学んだように、神の知識は無限であり、無謬であり、被造物に依存しません。問題は、「神が知っておられるから定められたのか、それとも神が定められたからその歴史をご

存じなのか」という点です。ウェストミンスター信仰告白は後者を選びます。つまり、神の知識は受動的な観察ではなく、神ご自身の主権的なご計画と結びついているのです。

五 エフェソ書一章をどう読むか

この点で重要なのが、エフェソの信徒への手紙一章です。パウロはこう語ります。「天地創造の前に、神はわたしたちをキリストにおいてお選びになりました。」（エフェソ 1・4）ここで注意したいのは、パウロが「神は、将来あなたが信じることを見て選ばれた」とは言っていないことです。むしろ、「キリストにおいて選ばれた」と語っています。つまり、選びの中心は人間ではなくキリストです。神の永遠のご計画は、まず御子イエス・キリストを中心として立てられ、そのキリストに結ばれる者たちが選ばれているのです。ここは非常に重要です。予定論を「私は選ばれているのだろうか」という不安から読むと、必ず行き詰まります。しかしパウロは、選びをキリストのうちに置いています。ですから、信仰者が見るべきは、自分の心の中ではなく、十字架と復活の主イエス・キリストなのです。

六 ローマ書八章の連なり

同じことはローマ書八章にも見られます。パウロは、「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似た者にしようと、あらかじめ定められました」（ローマ 8・29）と語ります。ここで「前もって知る」という言葉を、単なる情報として理解してはいけません。聖書において「知る」は、しばしば人格的な関係を意味します。神は、ご自身の民を愛し、覚え、契約のうちに置かれます。したがって、「前もって知る」とは、「神が遠くから観察していた」というより、「神が永遠からご自身の民を愛のうちに覚えておられた」という意味で理解する方が、聖書全体の用法に近いでしょう。そしてパウロは続けて、「あらかじめ定められた者たちを召し、召された者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになりました」（ローマ 8・30）と語ります。ここでは、神の救いの働きが一つの連続した流れとして描かれています。選びは、召し、義認、栄化へとつながる神の恵みの働きの始まりなのです。

七 人間の応答は本当に必要なのでしょうか

ここで、ある疑問が生まれます。「もし神が選ばれるなら、人間の信仰や悔い改めは不要なのではないか。」この問いに対して、聖書は明確に「いいえ」と答えます。イエスは繰り返し、「悔い改めて福音を信じなさい。」と命じられました。使徒たちも、「主イエスを信じなさい」と宣べ伝えました。神は人間を石のように扱われません。神は御言葉と聖霊によって人の心を開き、その人が実際に信じ、悔い改め、従うように導かれます。ですから、信仰は不要になるものではありません。むしろ、信仰そのものが神の恵みの賜物として与えられる

のです。改革派神学は、人間の応答を否定しません。ただ、その応答の最終的な根拠を神の恵みに置くのです。

歴史・神学コラム①

アウグスティヌスからカルヴァンへ

この問題は、教会史の中で長く議論されてきました。四～五世紀のアウグスティヌスは、救いは神の先行する恵みによると強く主張しました。その後、宗教改革者であるジャン・カルヴァンは、この伝統を受け継ぎつつ、選びをキリストにおける神の恵みとして語りました。一方、アルミニウスは、神の予知と人間の自由をより強く結び付けて理解しようとしていました。ウェストミンスター信仰告白は、基本的にはアウグスティヌスとカルヴァンの流れに立っています。しかし重要なのは、信仰告白が単なる論争の勝利を目指しているのではないことです。その目的は、「救いは最後まで神の恵みによる」という福音を守ることにあります。

八 選びの教理は、まずキリストを指し示します

ここまで、私たちは、神の選びは人間の将来の信仰を予見した結果ではなく、神ご自身の自由な恵みのご意志に基づくことを見ました。しかし、ここで大切なのは、選びの教理を「誰が選ばれているのか」という詮索のために用いないことです。パウロはエフェソの信徒への手紙で、選びを語るとき、常に「キリストにおいて」という言葉を用いています。「天地創造の前に、神はわたしたちをキリストにおいてお選びになりました」（エフェソ 1・4）。つまり、選びは抽象的な名簿の話ではありません。神はまず御子イエス・キリストを中心として救いのご計画を立てられ、そのキリストに結ばれる者たちを恵みのうちに受け入れておられます。ですから、信仰者が「私は本当に選ばれているのだろうか」と不安になるとき、見るべき場所は自分の心の中ではありません。見るべきは、十字架につけられ、復活されたイエス・キリストです。キリストを信頼し、キリストにより頼んでいる者は、その信仰そのものが神の恵みの働きであることを覚えるべきです。

九 選びと人間の責任

ここで再び、よくある疑問に向き合わなければなりません。「もし神が選ばれるなら、人間の信仰や悔い改めは意味がないのではないか」。聖書は、この問いに対して明確に「いいえ」と答えます。イエスは、「悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1・15）と命じられました。使徒たちも、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます」（使徒 16・31）と宣べ伝えました。神の選びは、人間の応答を不要にするものではありません。むしろ、神は御言葉と聖霊によって人の心を開き、その人が実際に信じ、悔い改め、従うよう

に導かれます。ですから、信仰は現実の応答です。私たちは実際に信じます。実際に悔い改めます。実際にキリストに従います。しかし、その応答の最終的な根拠は、私たちの力ではなく、神の先行する恵みにあるのです。

十 「棄却」の問題をどう扱うか

第三章を学ぶとき、多くの人が最も重く感じるのは、この問題でしょう。「神が選ばれるなら、選ばれない人もいないのではないか」。ウェストミンスター信仰告白は、この問題を避けてはいません。しかし同時に、非常に慎重に語っています。私たちは、聖書が語る以上のことを語ってはなりません。聖書は、神が恵みによって人を救われることを明確に語ります。同時に、人間の不信仰と罪の責任も明確に語ります。しかし、私たちは神の隠されたご計画をのぞき込むことはできません。カルヴァンも予定論を論じるとき「神が啓示しておられないことを詮索してはならない」と繰り返し警告しました。したがって、この教理を用いて「誰が救われ、誰が救われないのか」を判断することは、信仰告白の意図ではありません。私たちに示されているのは、福音です。そして福音は、すべての人に向かって宣べ伝えられます。

十一 選びの教理は、恐れのためではなく慰めのためにあります

ここが、この講義で最も大切にしたい点です。予定論は、しばしば人を不安にさせる教理として受け取られます。しかし、パウロがローマ書八章で予定を語る文脈を見てください。そこは、恐れ文脈ではありません。慰めの文脈です。

「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似た者にしようと、あらかじめ定められました」（ローマ 8・29）

「あらかじめ定められた者たちを召し、召された者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになりました」（ローマ 8・30）。

パウロがここで語りたいのは、神が始められた救いの働きは、最後まで神ご自身が完成してくださるという確信です。だから彼は続けて、「神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」（ローマ 8・31）と語るのです。もし救いが最終的に私たちの力にかかっているなら、私たちは決して安心できません。信仰が弱くなる日もあります。疑いに悩む日もあります。失敗する日もあります。しかし、神が始められた救いを神ご自身が完成してくださるなら、私たちは自分の弱さの中でも希望を持つことができます。これが、選びの教理が本来与える慰めです。

聖書神学コラム

「選び」は聖書全体でどのように語られているか

ここで、正典全体の流れを簡単に確認しておきましょう。

- アブラハムの選び — 神は一人の人を召し、すべての国々への祝福の約束を与えられました。
- イスラエルの選び — 神は民を選び、契約を結ばれました。
- ダビデの選び — 神は王を選び、永遠の王国の約束を与えられました。
- 残りの者の選び — 裁きの中でも、神はご自身の民を保たれました。
- キリストにおける選び — 新約では、選びはイエス・キリストにおいて完成します。
- 教会の選び — ユダヤ人も異邦人も、キリストにあって一つの民として召されます。

この流れを見ると、選びは単なる個人の運命の問題ではありません。神が世界を救うために、ご自身の民を形成していかれる救済史のテーマなのです。

歴史・神学コラム

カール・バルトの予定論の読み直し

20 世紀の改革派神学者カール・バルトは、予定論を「イエス・キリストにおける神の恵み」として読み直しました。バルトのすべての結論に同意する必要はありません。しかし、彼が強調した点は重要です。それは、予定論を抽象的な運命論として語るのではなく、キリスト論の中で語るべきだということです。神の選びは、キリストにおいて私たちに示されました。したがって、予定論は恐れ of 教理ではなく、福音の教理として語られるべきだということです。この点は、近年の改革派神学でも多くの神学者が重視しています。

まとめ

今日は、第三章第二節の後半を学びました。

- 神の選びは、キリストにおいて語られます。
- 人間の信仰と悔い改めは、現実の応答として求められます。
- しかし、その応答の最終的な根拠は神の恵みにあります。
- 私たちは神の隠されたご計画を詮索するのではなく、啓示された福音に耳を傾けます。

- 選びの教理は、信仰者を恐れさせるためではなく、神の恵みの確かさに慰めを与えるためにあります。

ですから、予定論を学んだ後に私たちが言うべき言葉は、「私は選ばれているだろうか」という不安ではありません。むしろ、「神が始められた救いの働きを、神ご自身が完成してくださる」という感謝と信頼です。そして、その確かさは、十字架と復活の主イエス・キリストにおいて示されています。